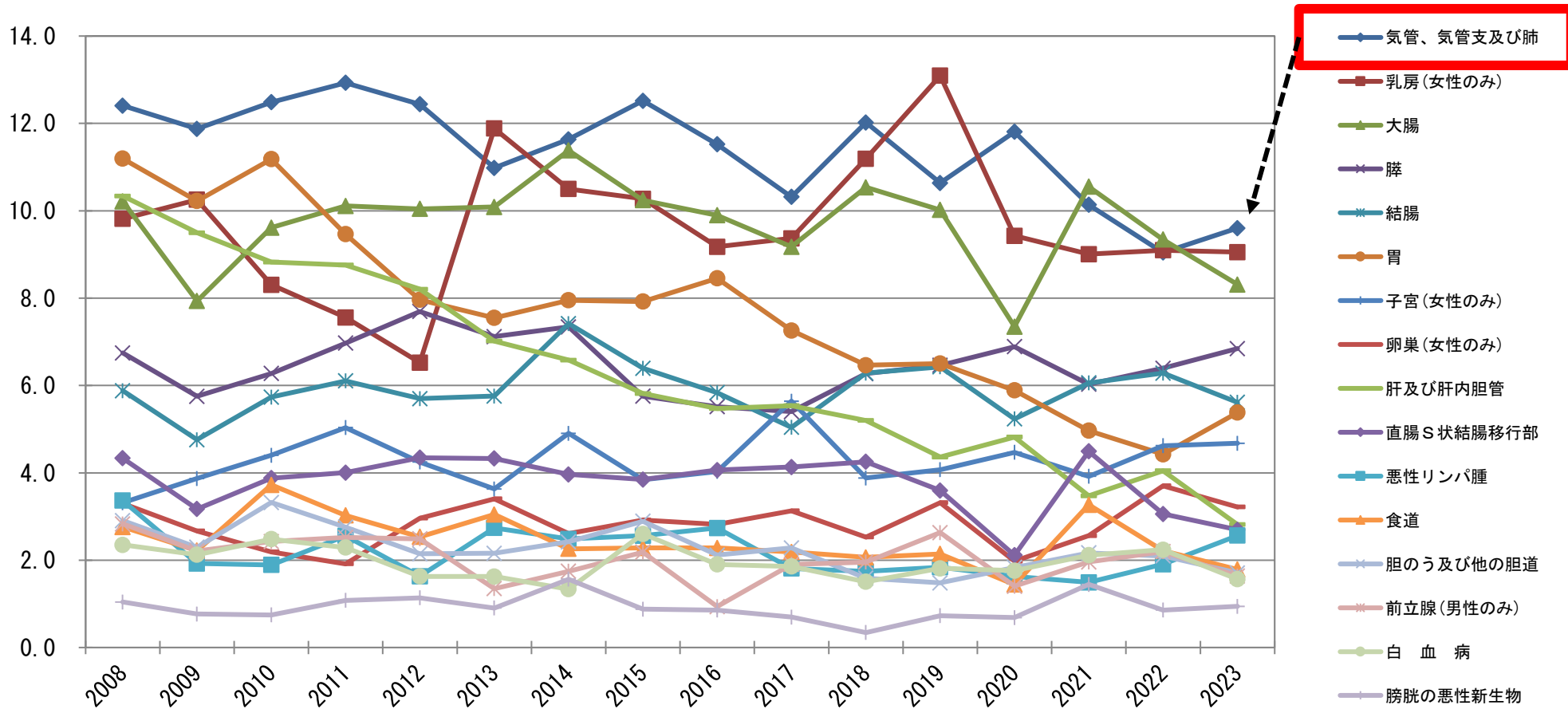


各がんの登録状況からみた 評価のまとめ

※令和6年度は、全国がん登録において2021（令和3）年の罹患者に関するデータが確定される年ですが、全国がん登録システムの障害により確定作業が遅れており、2020（令和2）年のデータが最新となります。

部位別 75歳未満年齢調整死亡率（人口10万対）

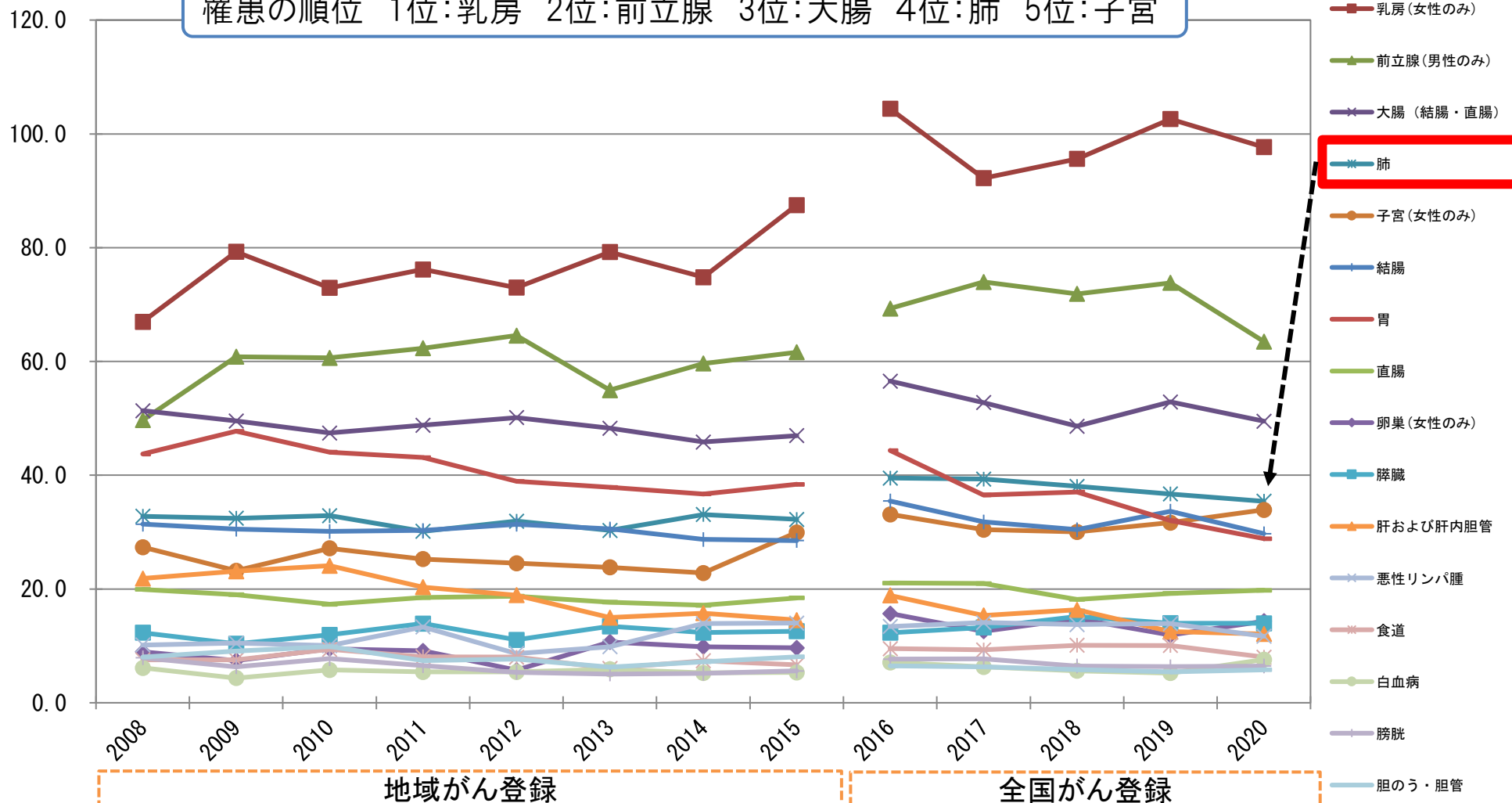


出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」（人口動態統計）

気管、気管支及び肺のがんは、長期的にみると横ばいで推移しており、比較している部位の中では、毎年1位または2位となっている。

部位別年齢調整罹患率(人口10万対)(上皮内がんを除く)

罹患の順位 1位:乳房 2位:前立腺 3位:大腸 4位:肺 5位:子宮



出典: 国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」(全国がん罹患モニタリング集計(MCIJ))
国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」(全国がん登録)

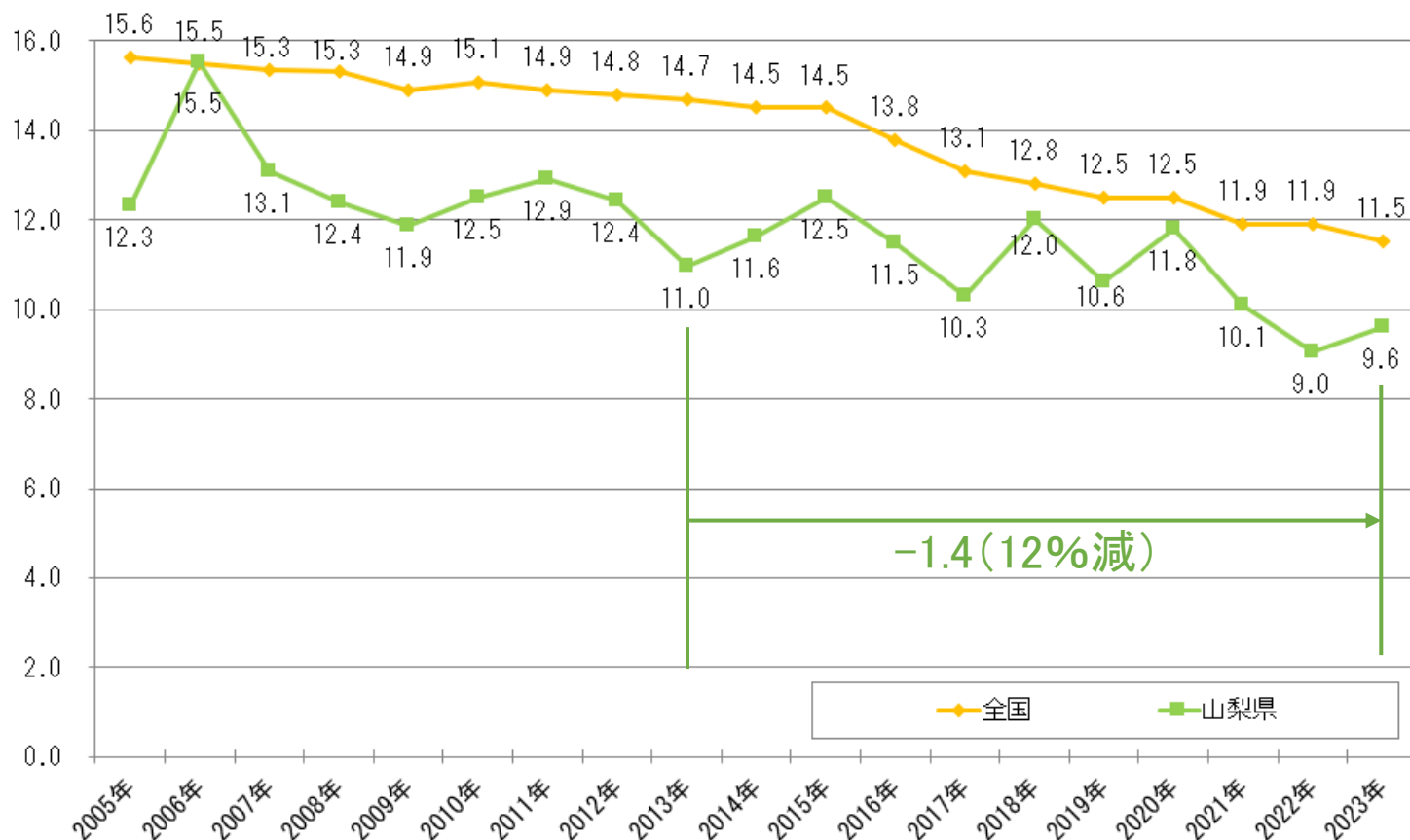
肺がんは、比較している部位の中で第4位にあり、横ばいで推移している。

肺がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約12%減少している。
2. 発見経緯別の進行度(2016～2020)は、検診等で発見されたうち限局が55.8%で、対策型検診を行う5がんのうち最も低い。
3. 5年相対生存率は、限局では80.1%であるが、領域では30.4%に半減しており、早期発見が重要である。

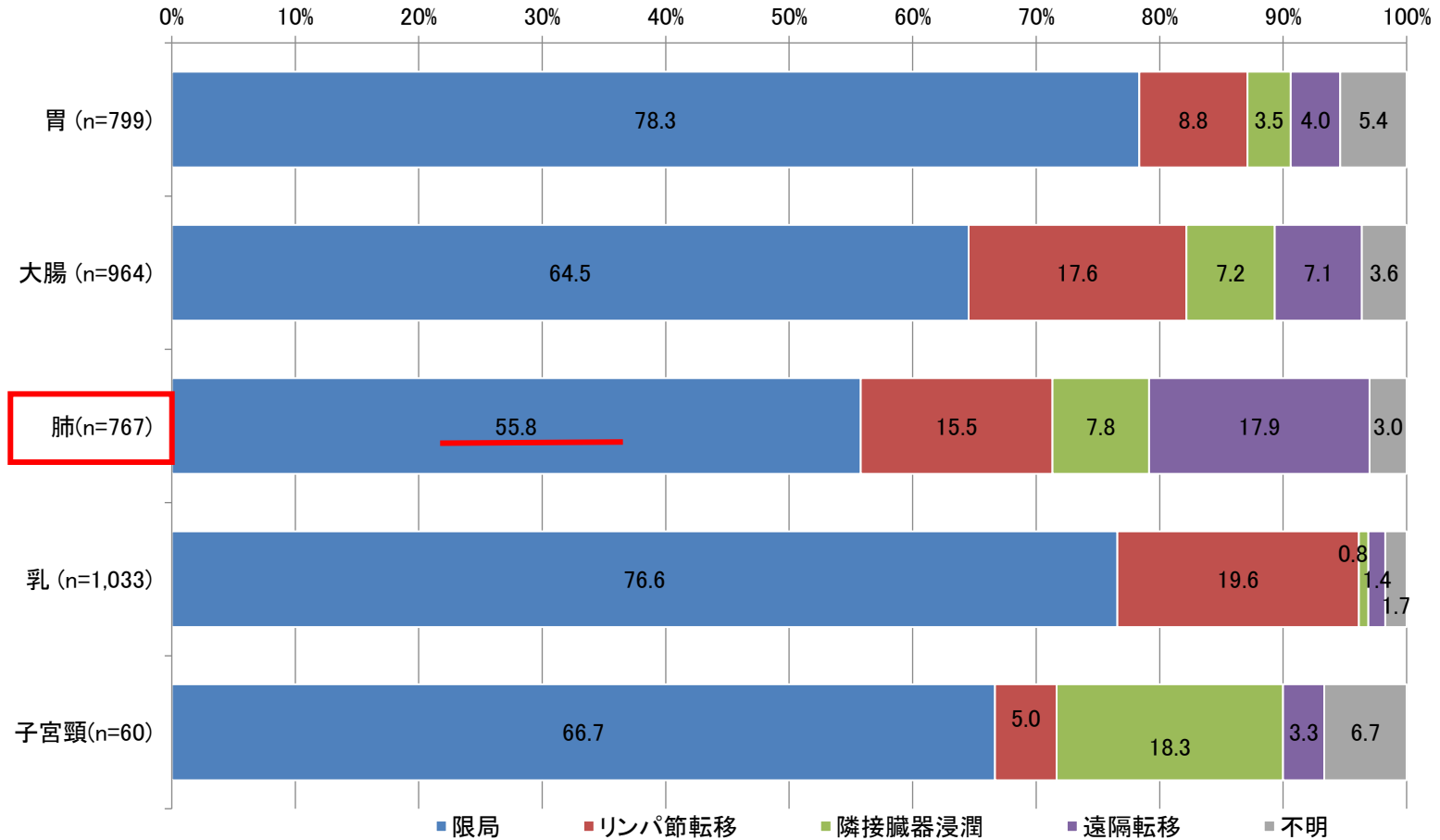
1. 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約12%減少している。(参考資料1スライド25)

肺がん75歳未満年齢調整死亡率（人口10万対）



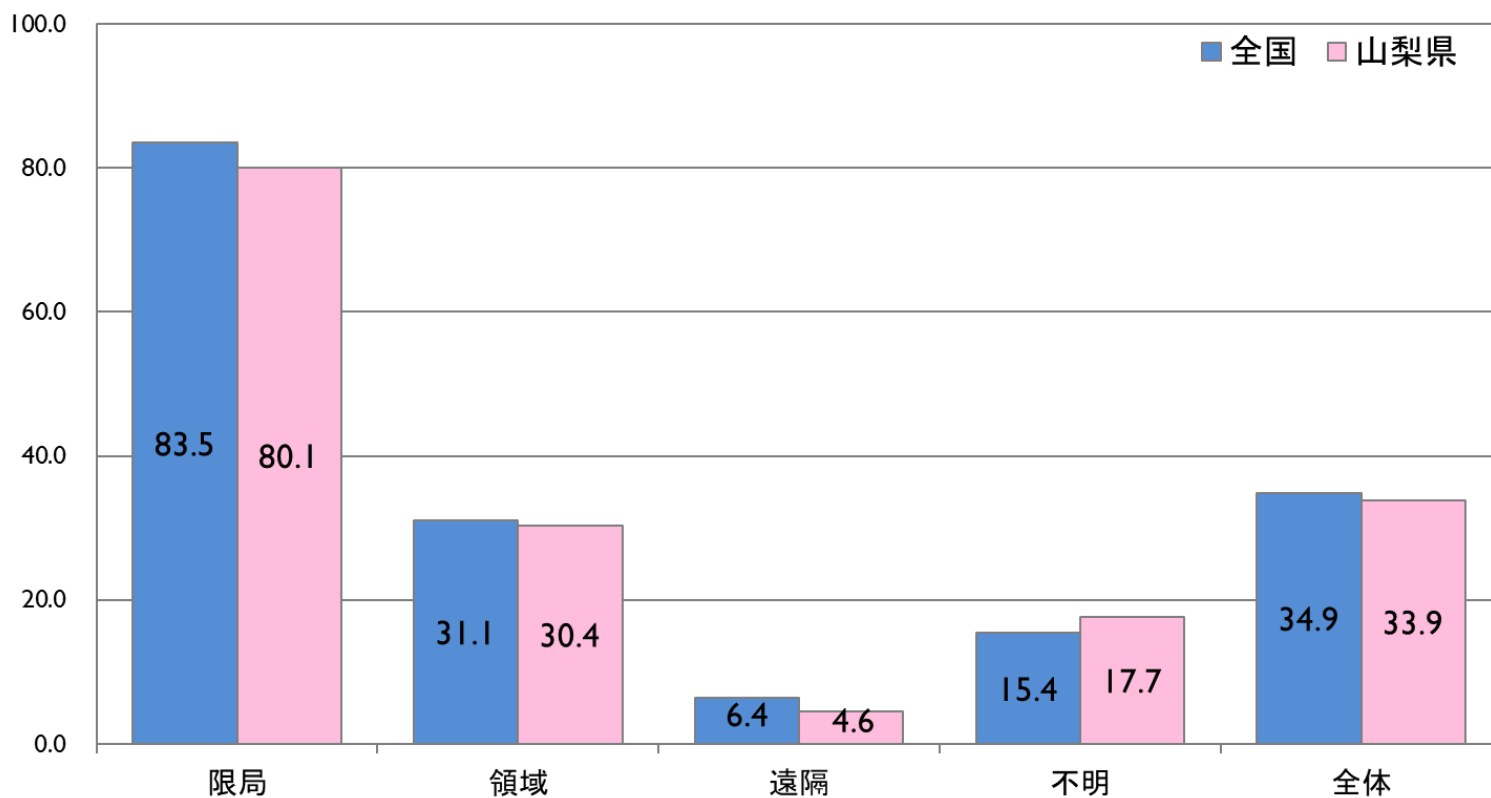
2. 発見経緯別の進行度(2016～2020)は、検診等で発見されたうち限局が55.8%で、対策型検診を行う5がんのうち最も低い。(参考資料1スライド32, 42, 52, 71, 86)

発見経緯検診・健診・ドッグの部位別進行度(2016～2020年)



3. 5年相対生存率は、限局では80.1%であるが、領域では30.4%に半減しており、早期発見が重要である。
(参考資料1スライド33)

肺がん進行度別5年相対生存率(2009～2011年)(%)



領域：リンパ節転移 + 隣接臓器浸潤

胃がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、長期的に全国を下回っており、2013年から2023年の10年間で28%減少している。
2. 発見経緯別の進行度(2016～2020)は、検診等で発見されたうち限局が78.3%で他のがんに比べて高い。
3. 5年相対生存率は、限局では97.9%であるが、領域では46.9%に半減しており、早期発見がより重要である。

大腸がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、長期的に横ばいで推移している。
2. 発見経緯別の進行度(2016～2020)は、検診等で発見されたうち限局が64.5%で、胃がんや乳がんの80%近い値と比べて低い。
3. 5年相対生存率は、限局では94.0%であるが、領域では77.1%に減少しており、早期発見が重要である。

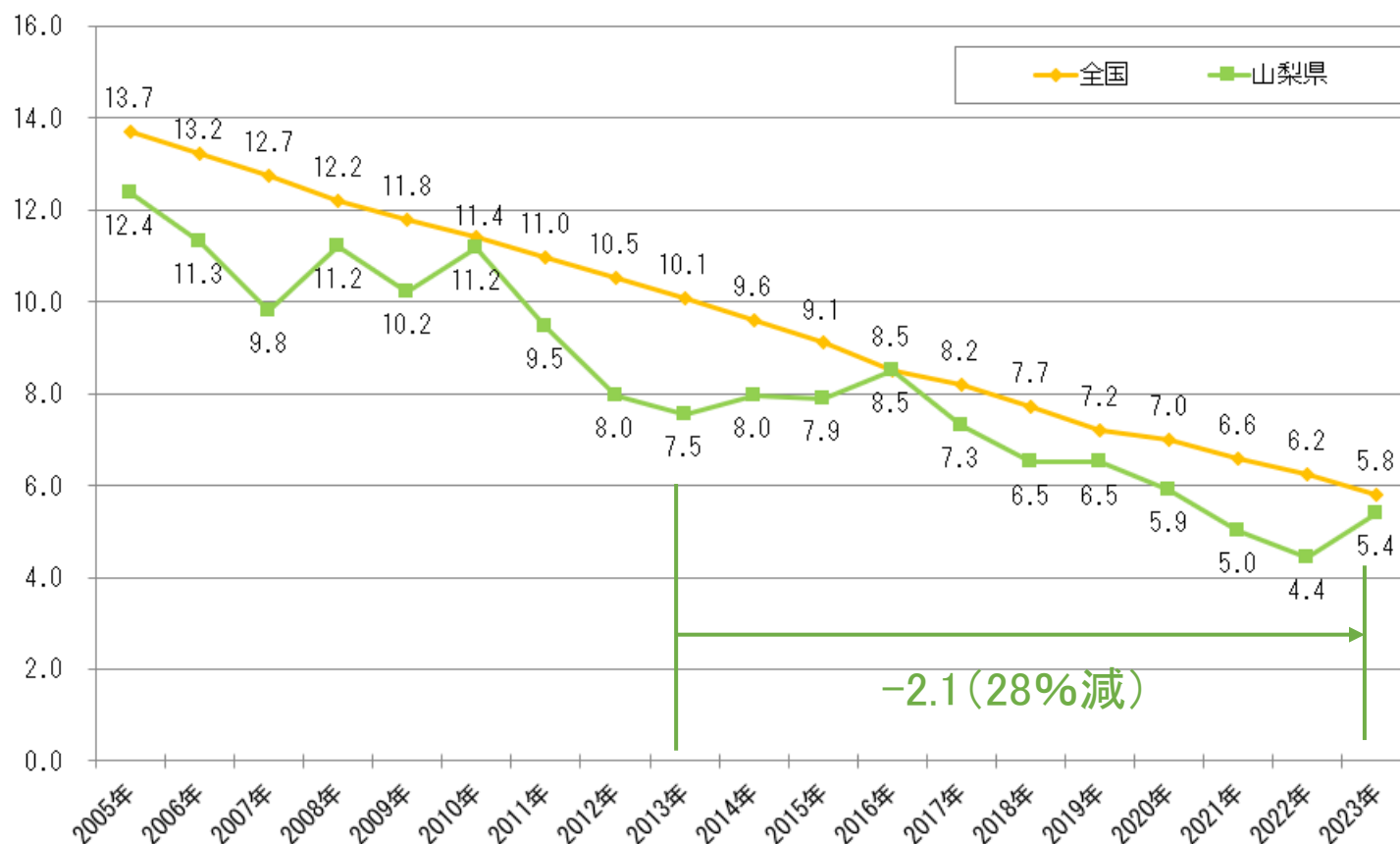
肝がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約60%減少し、2021年に初めて全国を下回った。
2. 発見経緯(2016～2020)は、他疾患の経過観察中が51.6%で、対策型検診を行う5がんに比べて最も高く、検診等は9.2%で最も低い。
3. 胃がんや大腸がんに比べ、進行度(2016～2020)は限局が60.3%で高いが、5年相対生存率は限局であっても59.4%と低い。

胃がん

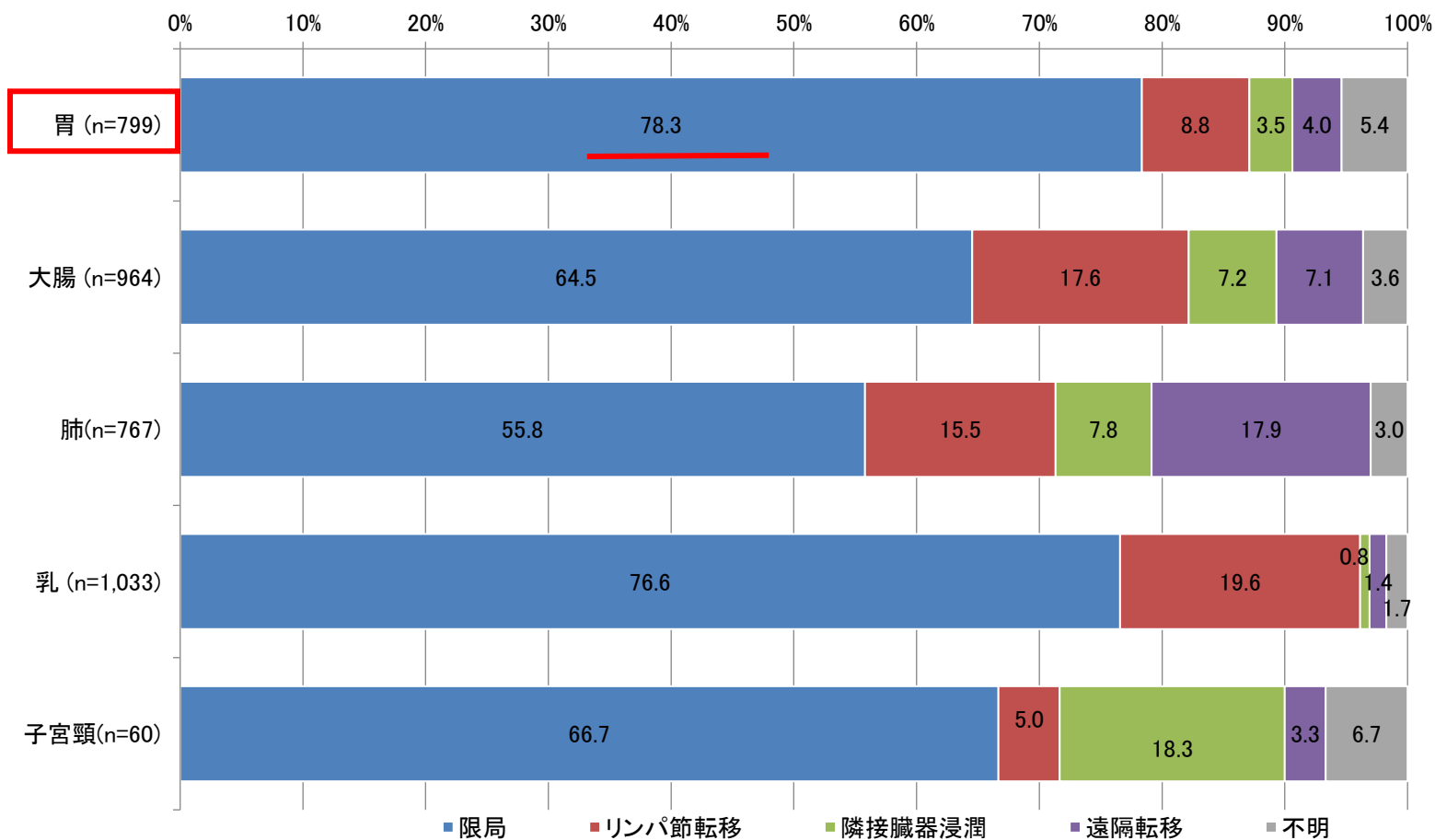
1. 75歳未満年齢調整死亡率は、長期的に全国を下回っており、2013年から2023年の10年間で28%減少している。(参考資料1スライド35)

胃がん75歳未満年齢調整死亡率（人口10万対）



2. 発見経緯別の進行度(2016～2020)は、検診等で発見されたうち限局が78.3%で他のがんに比べて高い。

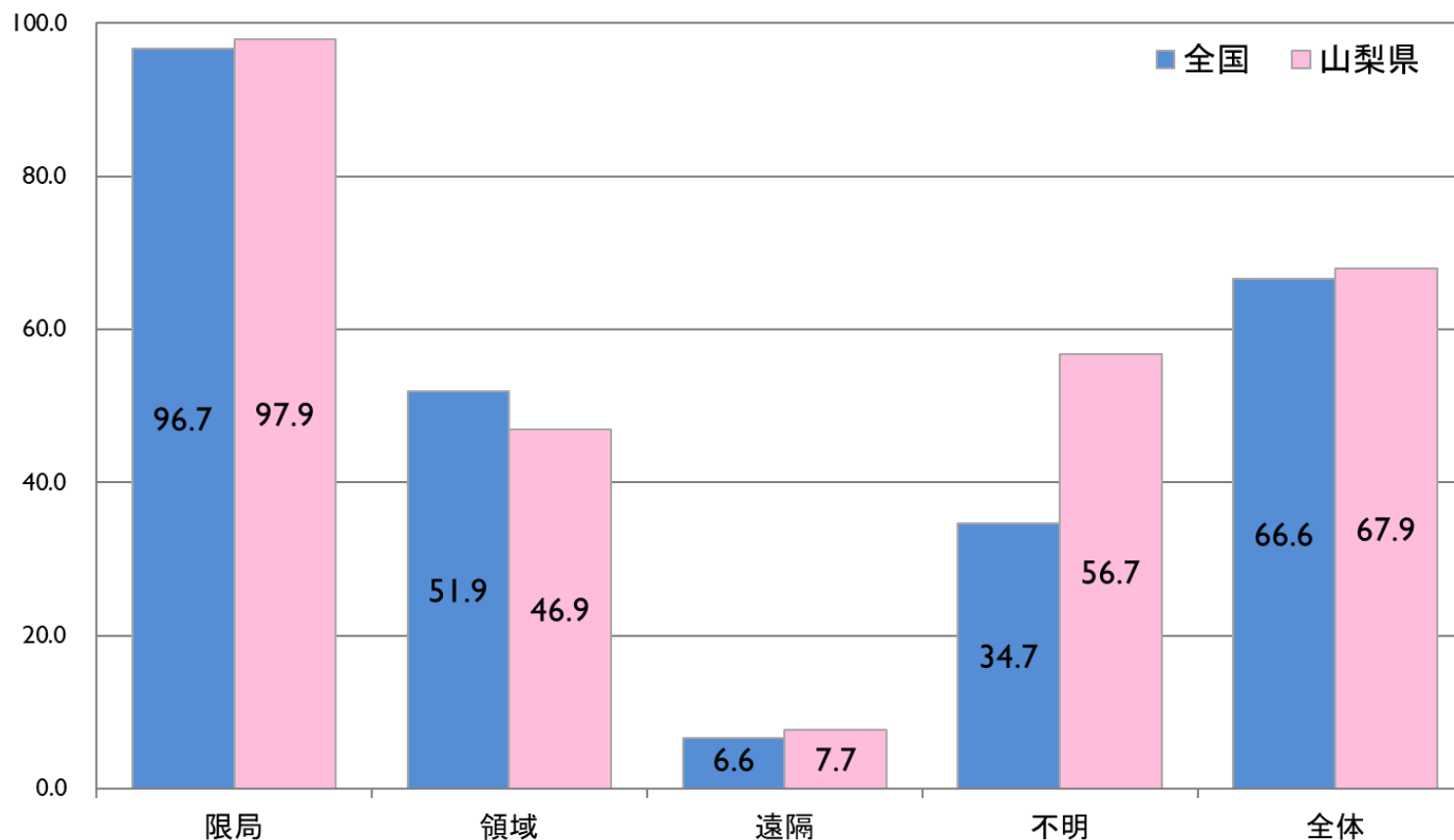
発見経緯検診・健診・ドッグの部位別進行度(2016～2020年)



胃がん

3. 5年相対生存率は、限局では97.9%であるが、領域では46.9%に半減しており、早期発見がより重要である。
(参考資料1スライド43)

胃がん進行度別5年相対生存率(2009～2011年)(%)

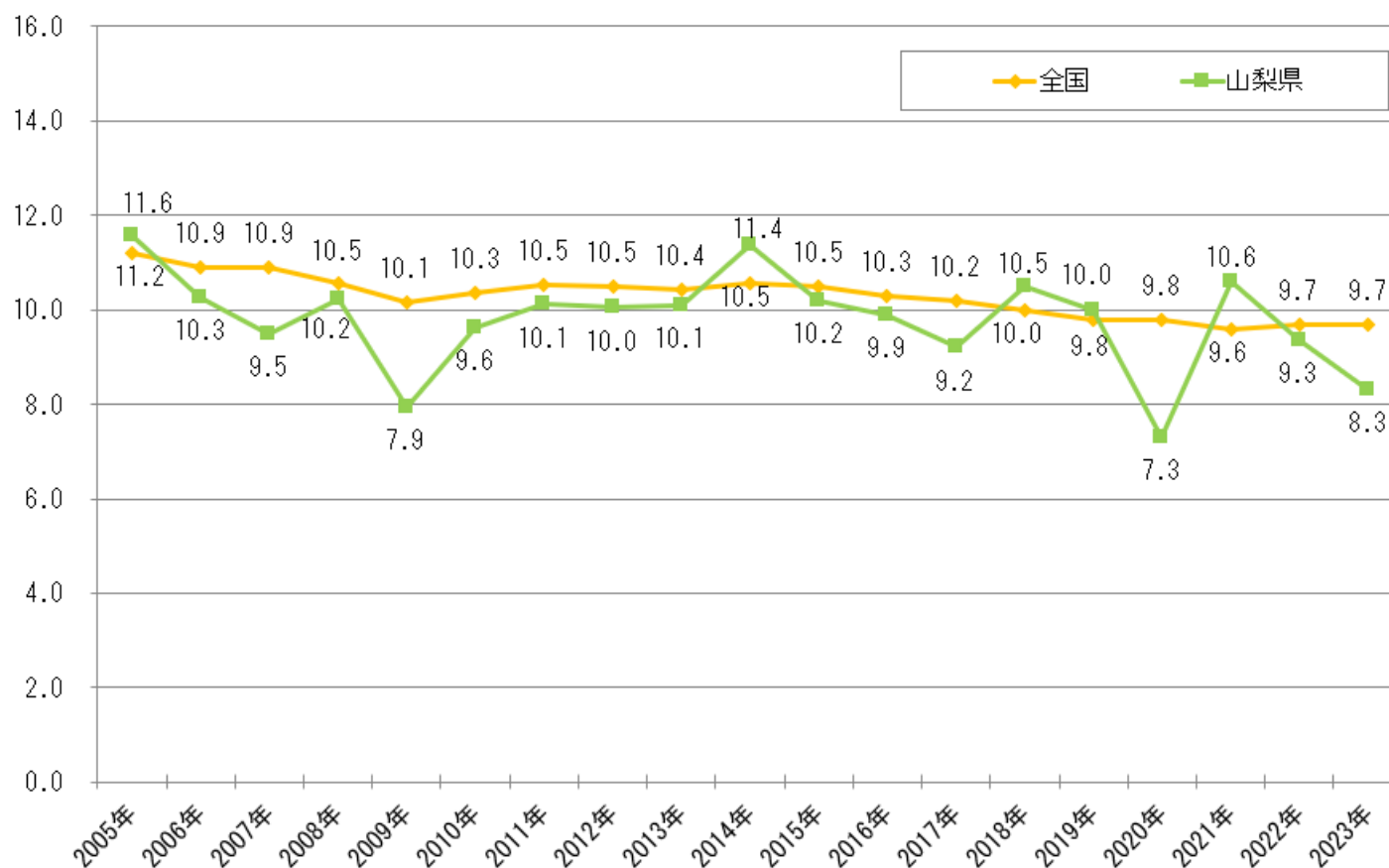


領域：リンパ節転移 + 隣接臓器浸潤

大腸がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、長期的にみると横ばいで推移しており、2021年に大きく増加し全国を上回ったが、その後は減少傾向にある。（参考資料1スライド45）

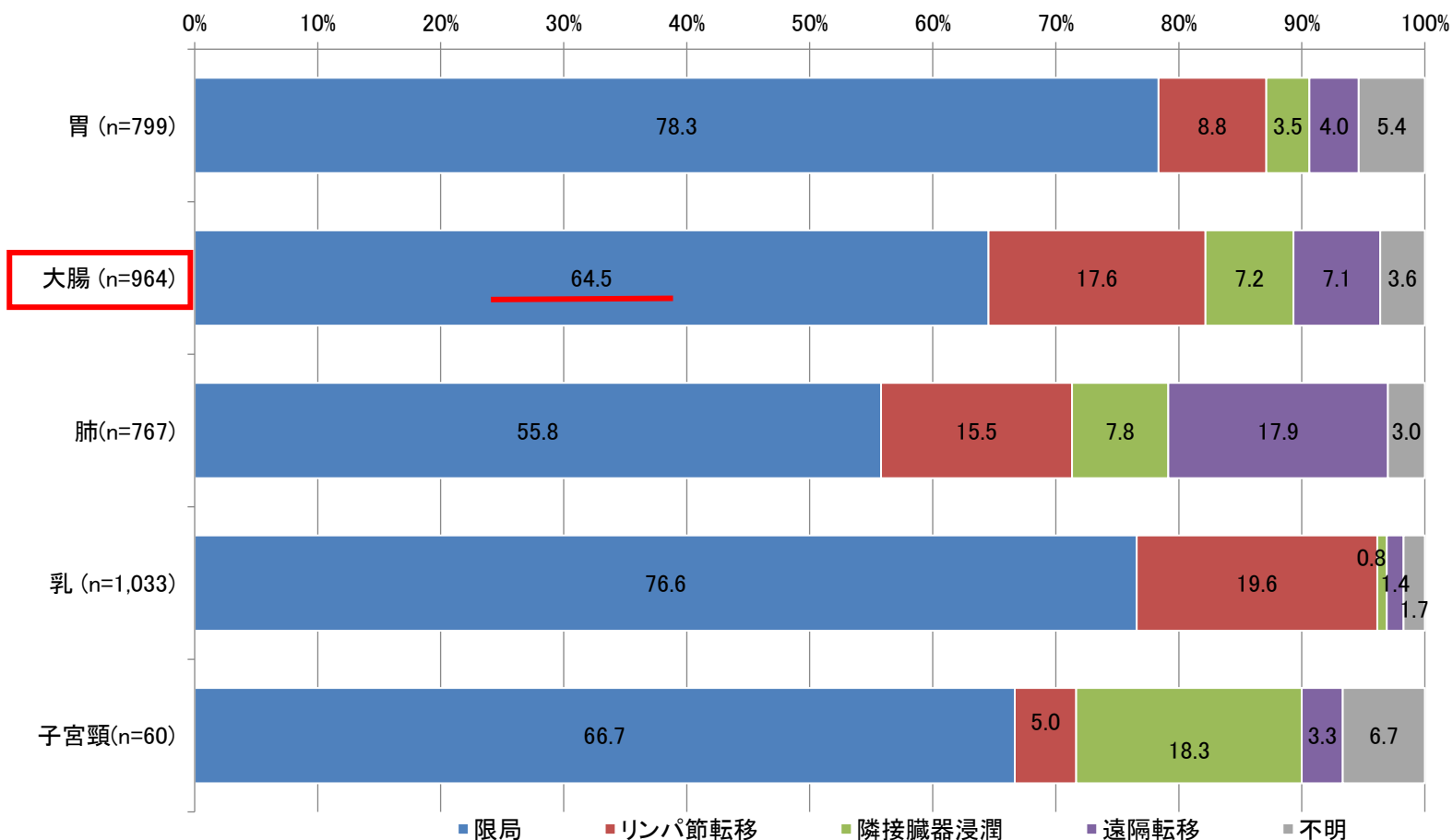
大腸がん75歳未満年齢調整死亡率（人口10万対）



大腸がん

2. 発見経緯別の進行度(2016～2020)は、検診等で発見されたうち限局が64.5%で、胃がんや乳がんの80%近い値と比べて低い。(参考資料1スライド32, 42, 52, 71, 86)

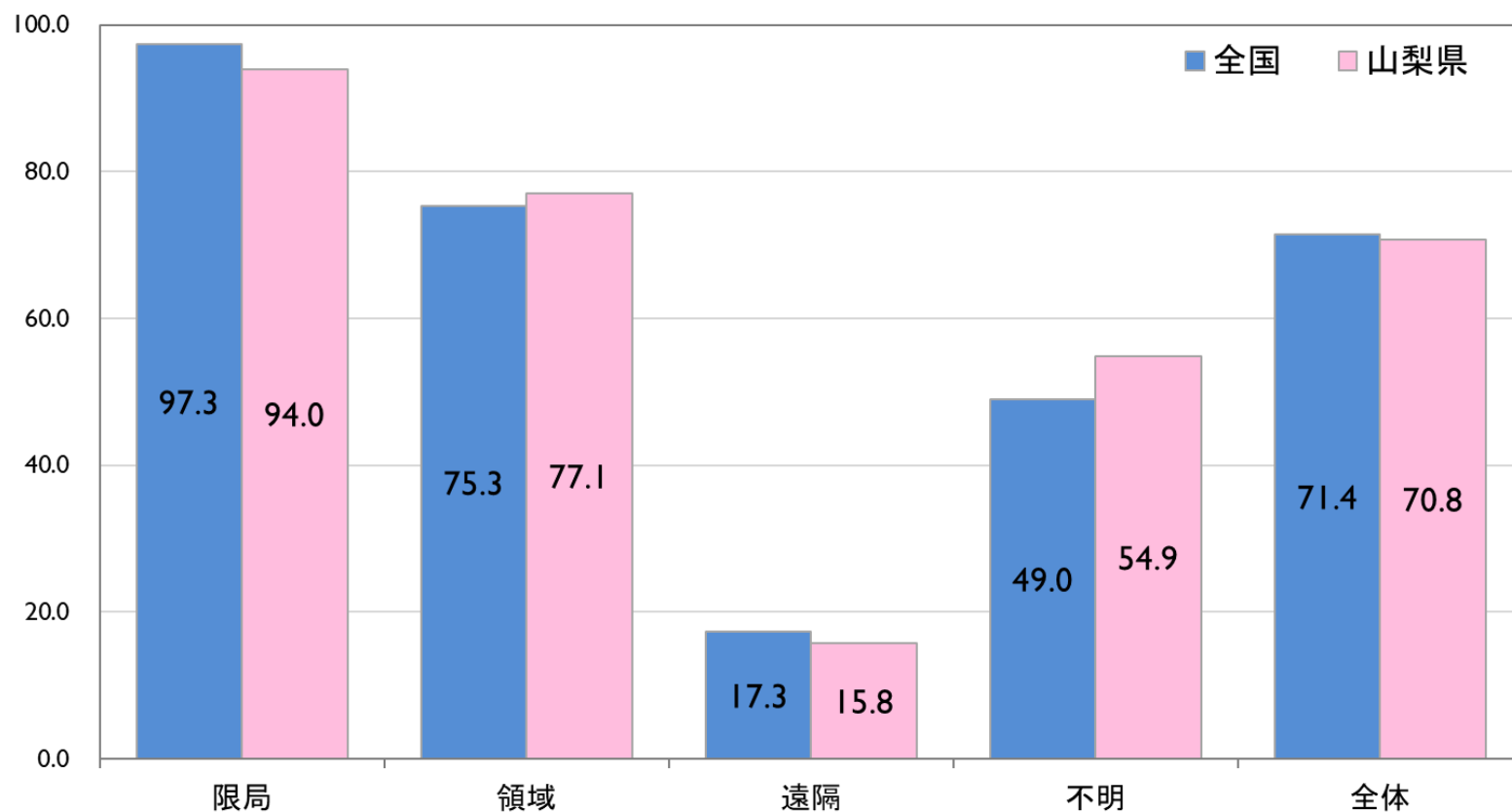
発見経緯検診・健診・ドッグの部位別進行度(2016～2020年)



大腸がん

3. 5年相対生存率は、限局では94.0%であるが、領域では77.1%に減少しており、早期発見が重要である。
(参考資料1スライド53)

大腸がん進行度別5年相対生存率(2009～2011年)(%)

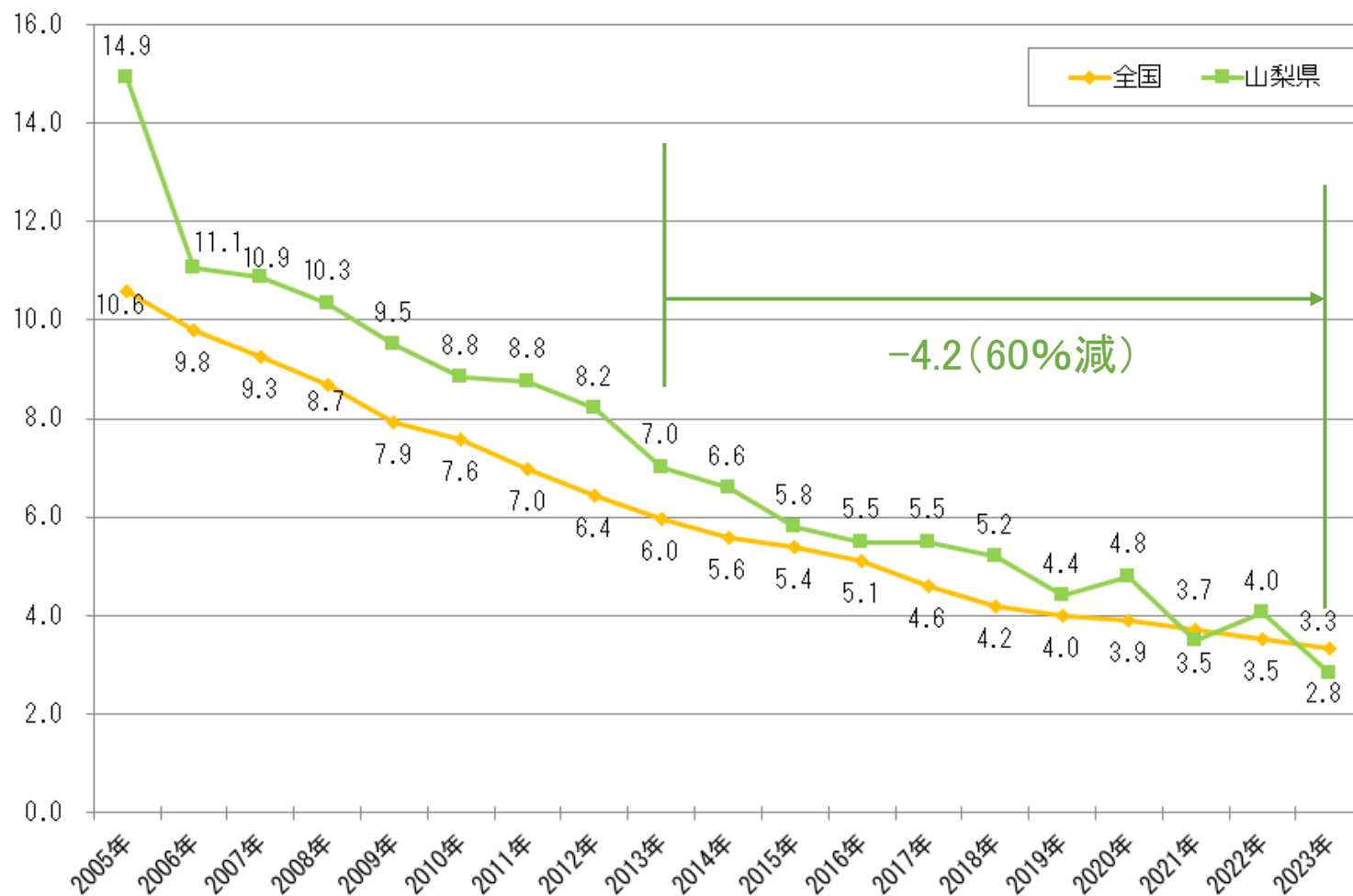


領域：リンパ節転移 + 隣接臓器浸潤

肝がん

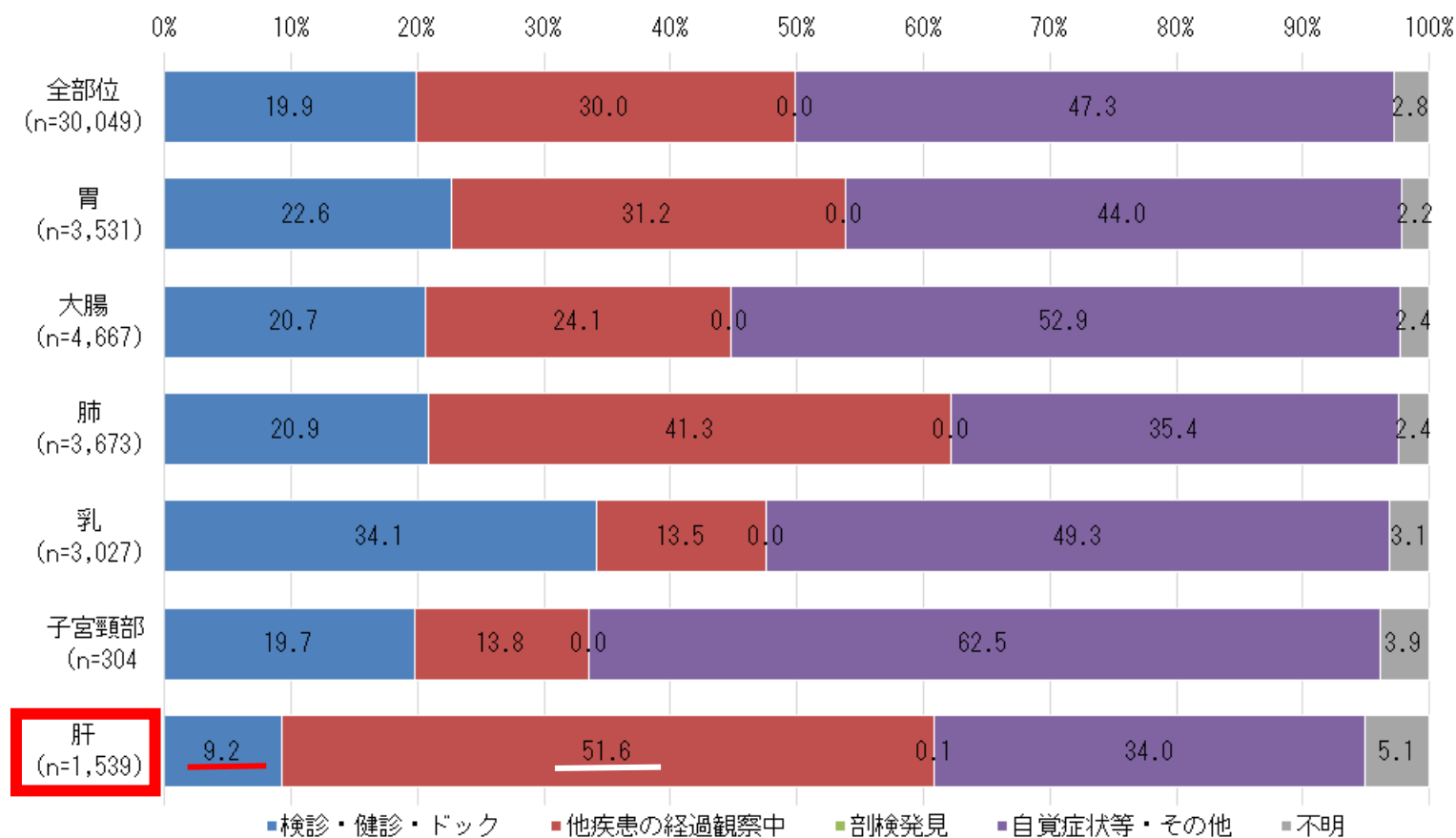
1. 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約60%減少し、2021年に初めて全国を下回った。
(参考資料1スライド55)

肝がん75歳未満年齢調整死亡率（人口10万対）



2. 発見経緯(2016～2020)は、他疾患の経過観察中が51.6%で、対策型検診を行う5がんに比べて最も高く、検診等は9.2%で最も低い。(参考資料1スライド16)

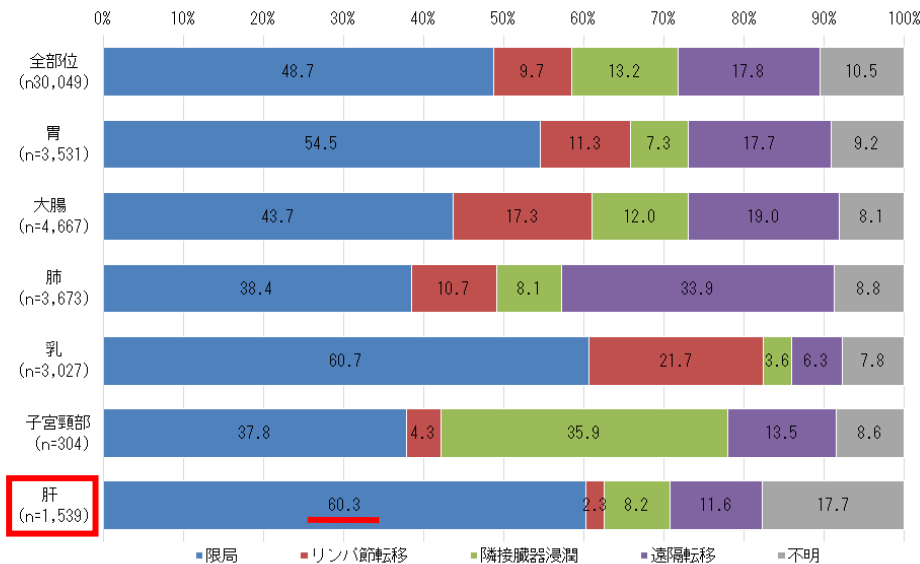
部位別の発見経緯 (2016～2020年)



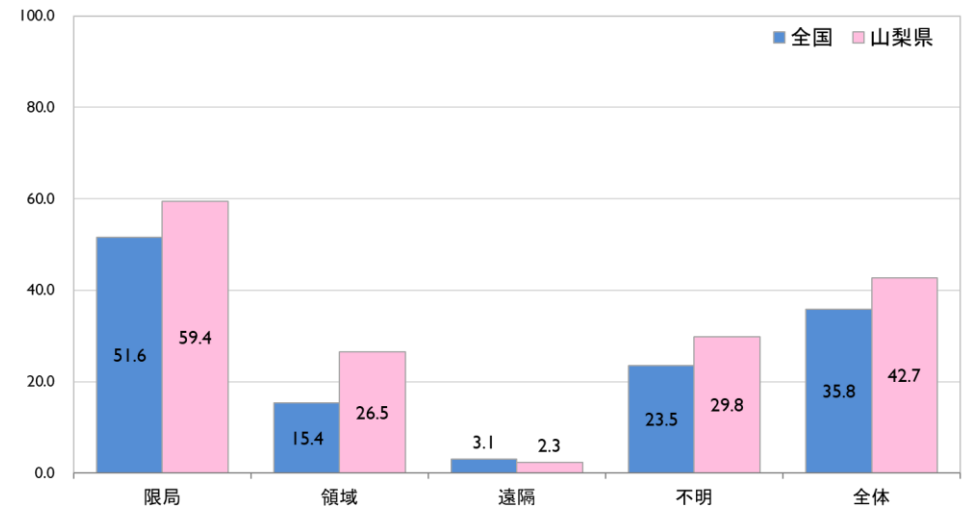
肝がん

3. 胃がんや大腸がん比べ、進行度(2016~2020)は限局が60.3%で高いが、5年相対生存率は限局であっても59.4%と低い。(参考資料1スライド17、63)

部位別の進行度 (2016~2020年)



肝がん進行度別5年相対生存率(2009~2011年)(%)



領域：リンパ節転移 + 隣接臓器浸潤

出典：全国がん罹患モニタリング集計2009~2011年生存率報告

乳がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、年毎に増減はあるが長期的にやや増加傾向で推移している。
2. 5年相対生存率は、限局98.9%、領域92.7%であり、いずれも90%を超えている。
3. 発見経緯は、検診等が34.1%で他のがんに比べて高いが、自覚症状等も49.3%ある。
4. 発見経緯別の進行度(2016～2020)は、自覚症状等で発見されたうち限局が50.7%で、他のがんに比べ高いことから、検診の定期受診だけでなくブレスト・アウェアネス(乳房を意識する生活習慣)の啓発普及に努める必要がある。

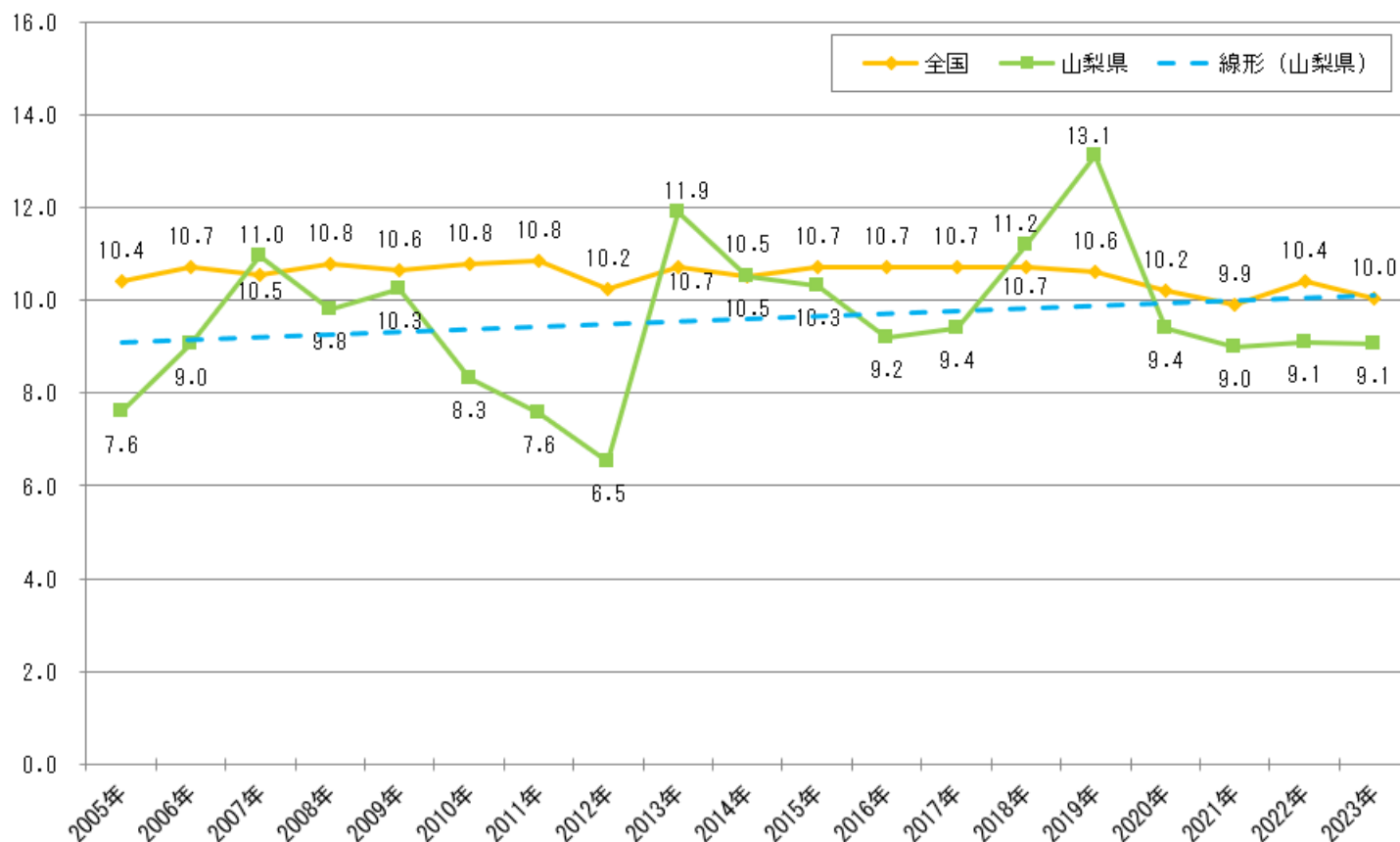
子宮頸がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率(子宮がん)は、年毎に増減はあるが長期的にやや増加傾向で推移している。
2. 年齢階級別罹患数は、上皮内がんを含む場合は30代後半がピークであることから、若年層への検診受診勧奨が重要である。
3. 上皮内がんを含む発見経緯別の進行度(2016～2020)は、検診等で発見されたうち上皮内がん及び限局が9割を占めるのに対し、自覚症状等ではこれらが6割にとどまる。
4. 5年相対生存率は、限局が98.5%であるが、領域では72.0%に減少しており、早期発見が重要である。

乳がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、年毎に増減はあるが長期的にやや増加傾向で推移している。
(参考資料1スライド65)

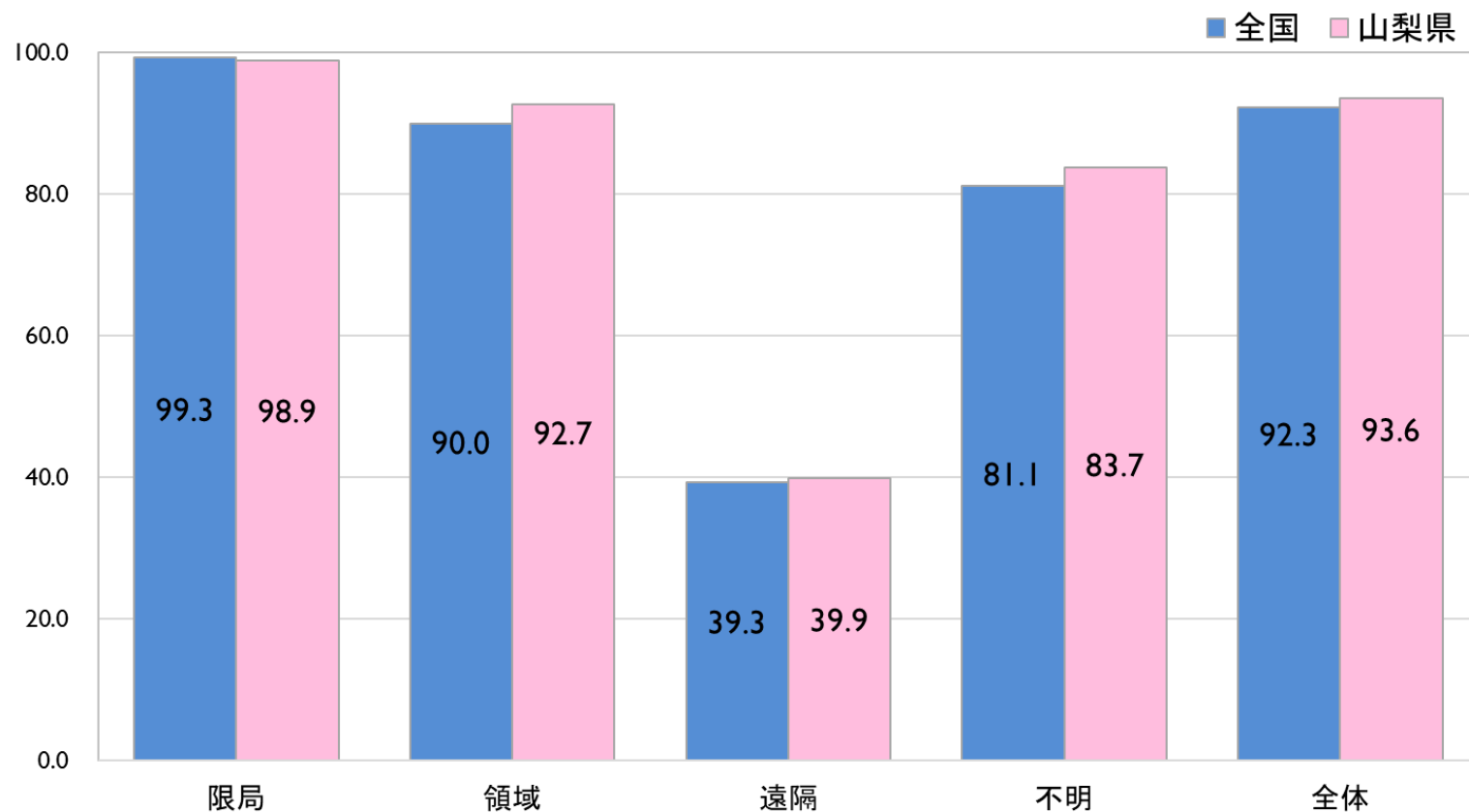
乳がん(女性)75歳未満年齢調整死亡率の全国との比較 (人口10万対)



乳がん

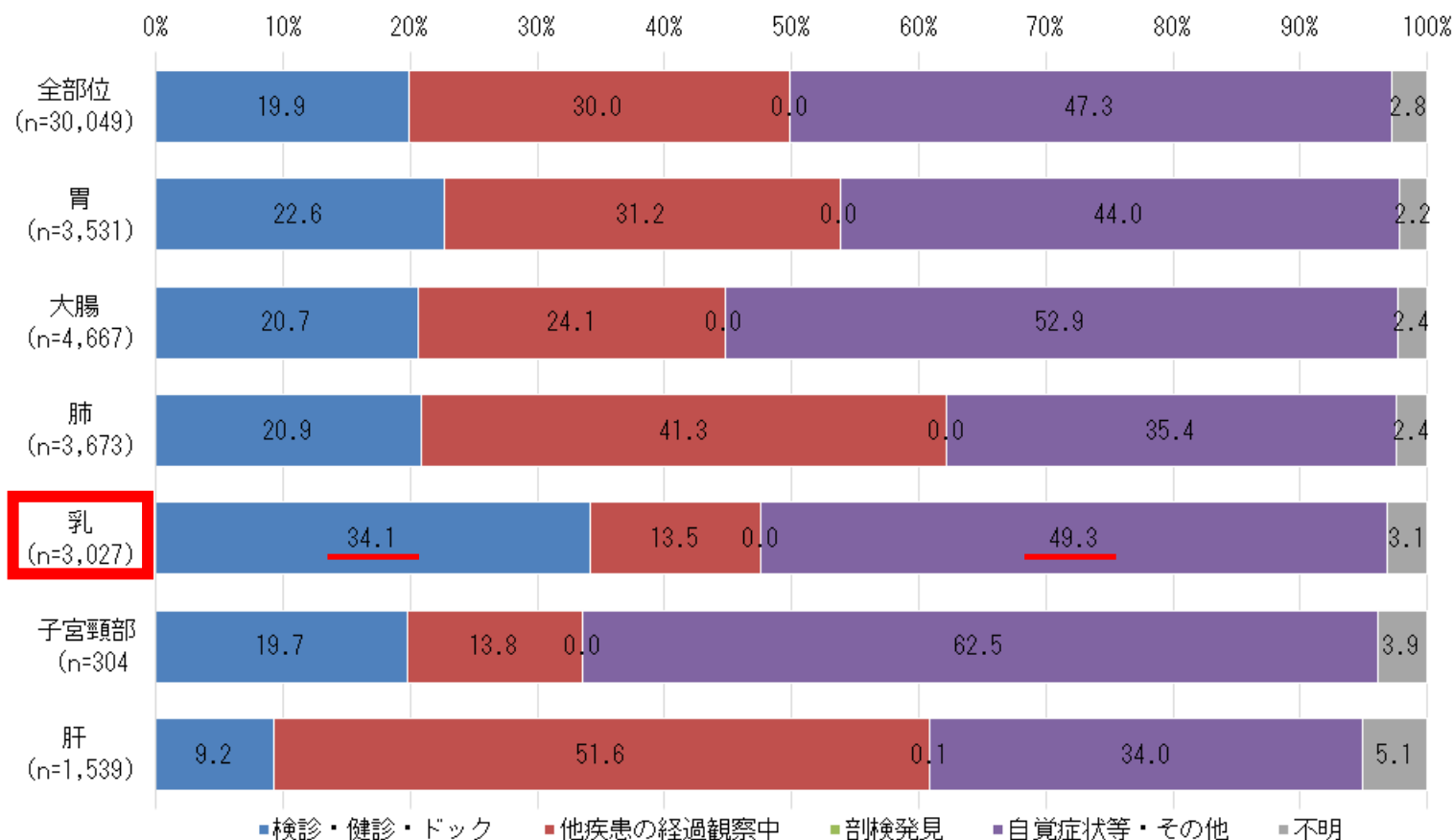
2. 5年相対生存率は、限局98.9%、領域92.7%であり、いずれも90%を超えている。
(参考資料1スライド72)

乳がん(女性)進行度別5年相対生存率(2009～2011年)



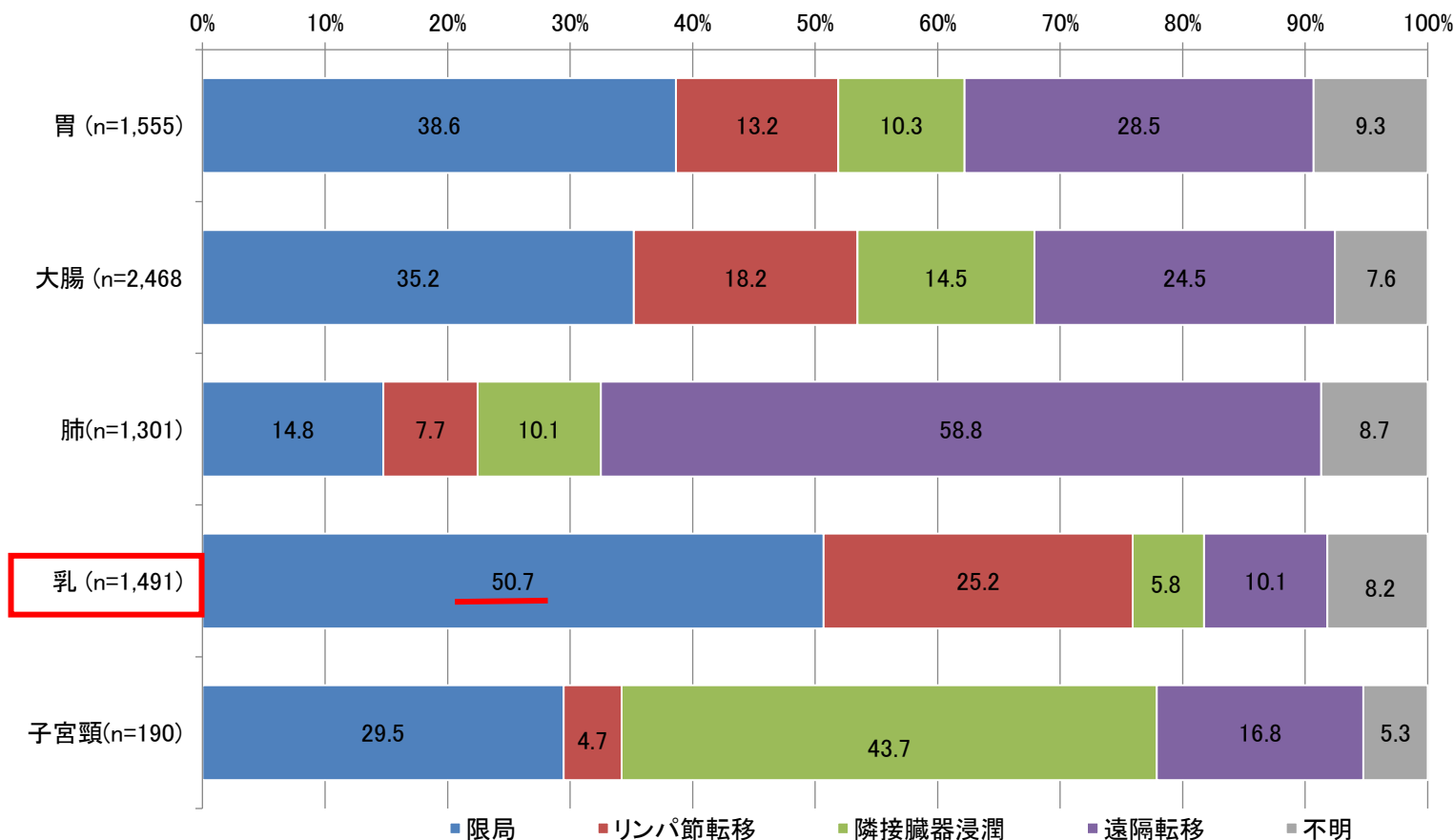
3. 発見経緯(2016~2020)は、検診等が34.1%で他のがんに比べて高いが、自覚症状等も49.3%ある。
(参考資料1スライド16)

部位別の発見経緯 (2016~2020年)



4. 発見経緯別の進行度(2016～2020は、自覚症状等で発見されたうち限局が50.7%で、他のがんに比べ高いことから、検診の定期受診だけでなくブレスト・アウェアネス(乳房を意識する生活習慣)の啓発普及に努める必要がある。(参考資料1スライド32, 42, 52, 71, 86)

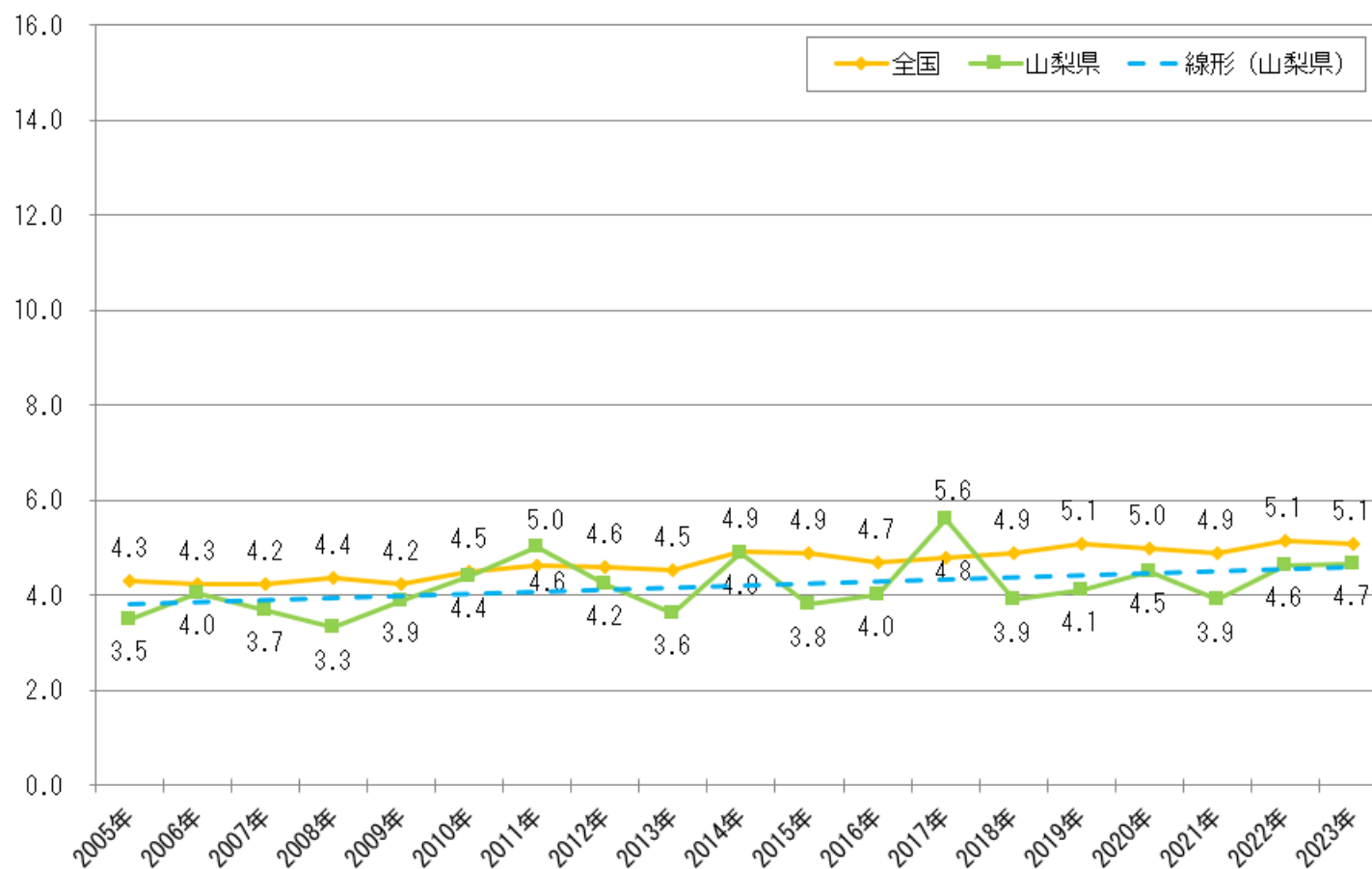
発見経緯自覚症状・その他の部位別進行度



子宮頸がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、年毎に増減はあるが長期的にやや増加傾向で推移している。
(参考資料1スライド74)

子宮がん75歳未満年齢調整死亡率の全国との比較 (人口10万対)

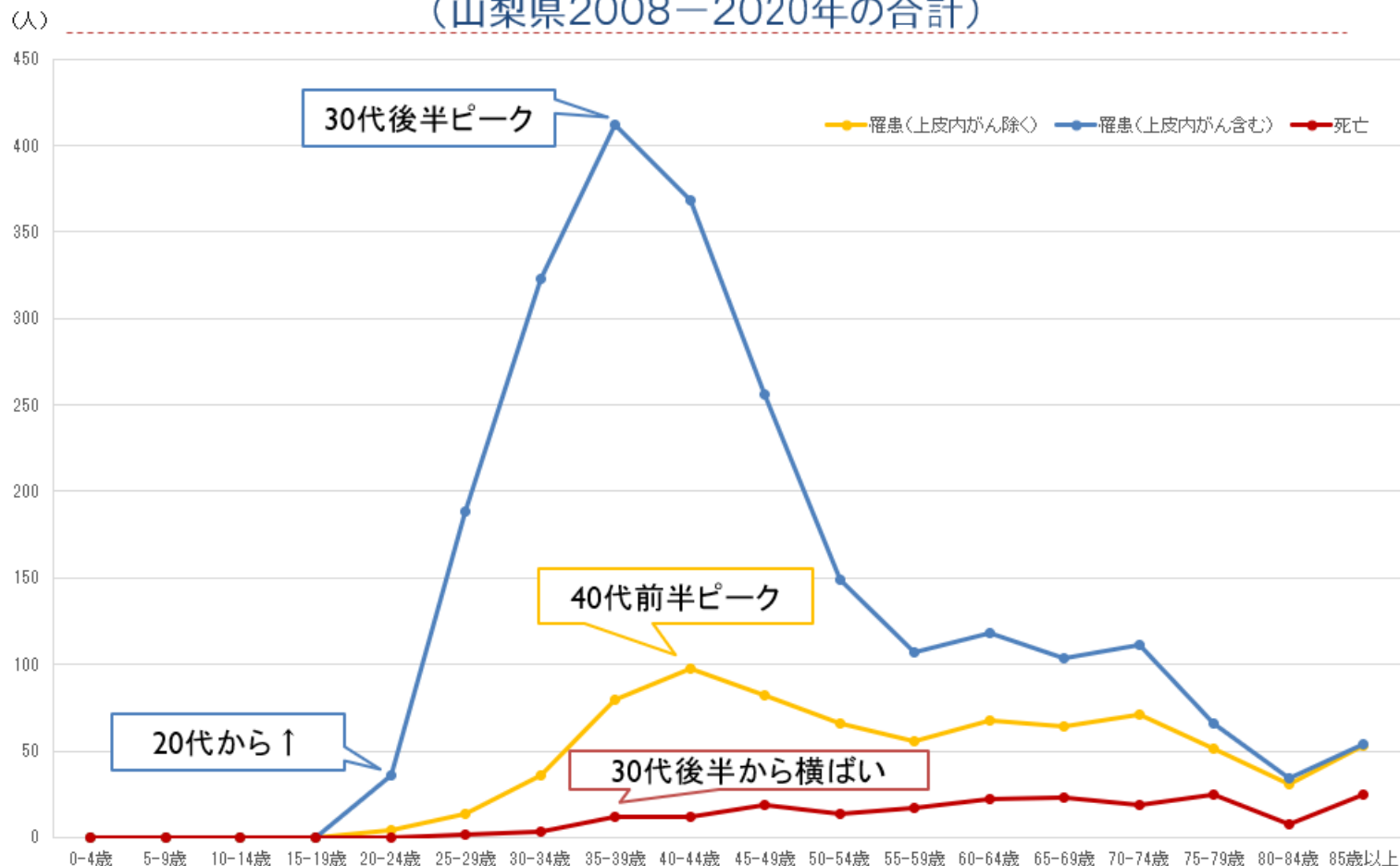


子宮頸がん

2. 年齢階級別罹患数は、上皮内がんを含む場合は30代後半がピークであることから、若年層への検診受診勧奨が重要である。（参考資料1スライド77）

子宮頸がん年齢階級別罹患数と死亡数の比較

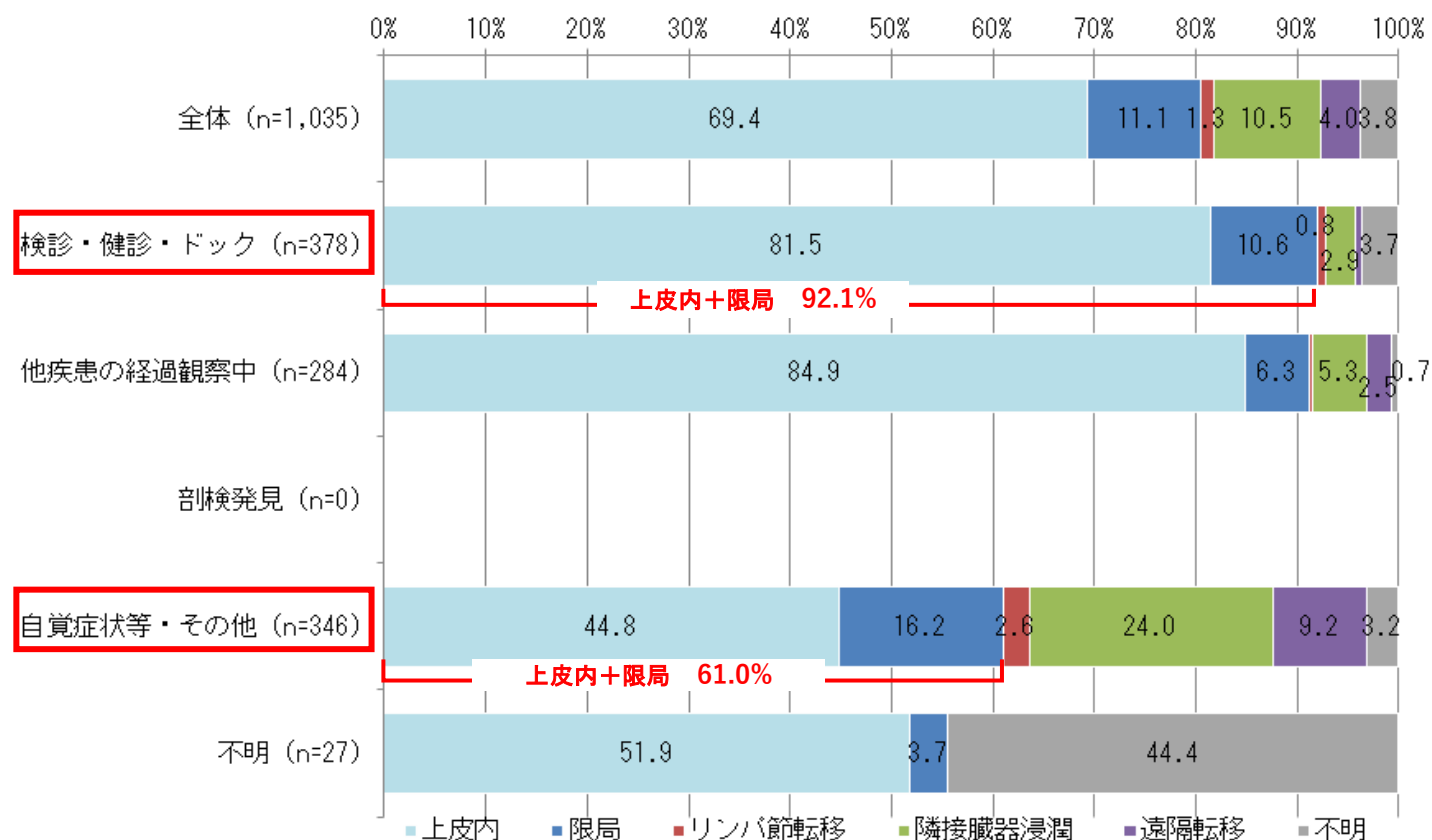
（山梨県2008－2020年の合計）



子宮頸がん

3. 上皮内がんを含む発見経緯別の進行度(2016~2020)は、検診等で発見されたうち上皮内がん及び限局が9割以上を占めるのに対し、自覚症状等ではこれらが6割にとどまる。(参考資料1スライド85)

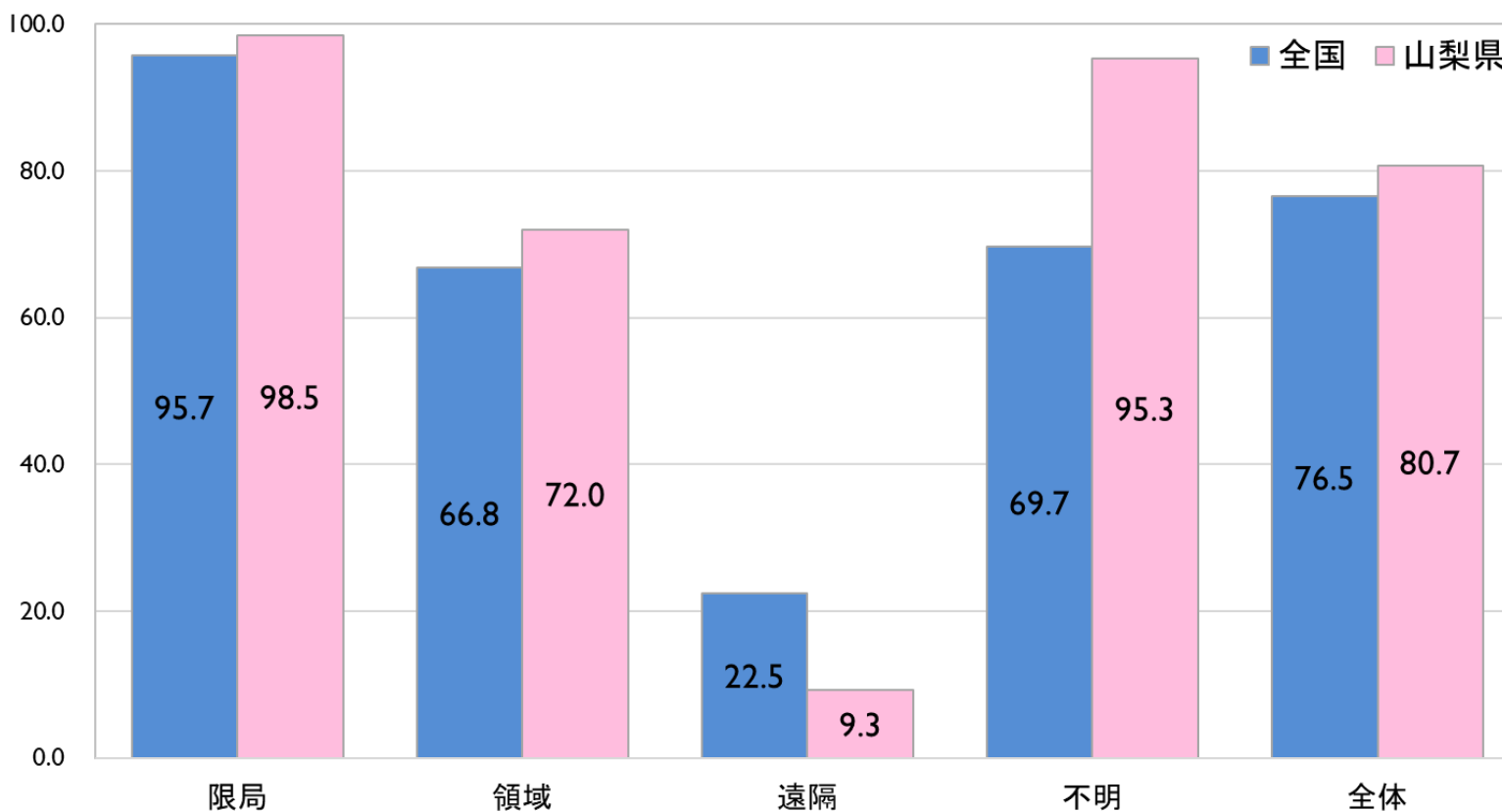
子宮頸がん(上皮内がん含む)発見経緯別の進行度(2016~2020年)



子宮頸がん

4. 5年相対生存率は、限局が98.5%であるが、領域では72.0%に減少しており、早期発見が重要である。
(参考資料1スライド87)

子宮頸がん進行度別 5 年相対生存率 (2009～2011年) (%)



領域：リンパ節転移 + 隣接臓器浸潤